

# さきたま講座のアンケート分析

西口正純

## 1 はじめに

さきたま講座は、さきたま史跡の博物館の学習支援事業として行われ講師は、外部講師と当館学芸員が担当している。平成22年度の講座構成は第1表のとおり、「企画展関連講座」「世界遺産関連講座」「学芸員の視点」とから構成され平成22年度は合計12回実施され、毎月いずれかの講座が開催されている。

さきたま講座は毎回多くの受講者の参加があり、平成22年度には12回の講座で合計996人の参加があった。今後開催する講座の在り方の参考とするため、受講者に毎回アンケート調査を実施しており、その回収率は70%であり本講座も一定程度定着した感があることから、平成22年度実施アンケートの分析を行いそれぞれの傾向を把握したい。

## 2 実施講座の概要

企画展関連講座は、企画展「稲荷山出現以前の古墳」・企画展「祈りとまじない」に合わせて各2回ずつの計4回開催された。「埼玉における古墳の出現」では、埼玉県における弥生時代の墓制と初期古墳の登場の様子を通して、吉見町の前方後方墳「山の根古墳」が埼玉県最古の古墳となる可能性が高いとする考えを示した。

「関東の前期古墳」では、東海大学教授北條芳隆氏にご講義をいただいた。講義の概要は、前方後円墳の被葬者が古墳築造と耕地開発との密接な関わりがあるとの前提でとらえて、前期古

No.	講座タイトル	講師	所属	その他
1	埼玉における古墳の出現	利根川章彦	当館職員(当時)	企画展関連講座1
2	関東の前期古墳	北條芳隆	東海大学教授	企画展関連講座2
3	金太郎は、なぜ斧を担いでいるのか	田中英司	当館職員	学芸員の視点①
4	埼玉の玉	石岡憲雄	当館職員	学芸員の視点②
5	国宝鉄剣を科学する	野中仁	当館職員	世界遺産関連講座1
6	北京原人の骨はどこに	井上尚明	歴史と民俗の博物館	学芸員の視点③
7	遺跡と文献から見た古代のまつり	平野卓司	横浜市歴史博物館	企画展関連講座1
8	祈りとまじないの考古学	君島勝秀	当館職員	企画展関連講座2
9	身を飾る縄文人	栗島義明	当館職員	学芸員の視点④
10	竜宮城と前方後円墳	中村倉司	当館職員	学芸員の視点⑤
11	埼玉古墳群から東国の古墳文化を考える	関義則	埼玉県平和資料館	世界遺産関連講座2
12	激動の弥生終末	佐藤康二	当館職員	学芸員の視点⑥

第1表 平成22年度さきたま講座一覧

墳は「開拓に向けた前進拠点ないし玄関口として、新たな時代への導引役を担う事となった人々の採用した墓」として築かれると言う話であった(北條2010)。

横浜市歴史博物館の平野卓治氏による「遺跡と文献から見た古代のまつり」では、古代の人々の日常生活空間である「村」におけるまつりの様相を文献から探るもので、大規模な祭祀遺跡として注目される島根県青木遺跡を例に上げ、農耕儀礼に伴う共同体的飲食儀礼を推察された。

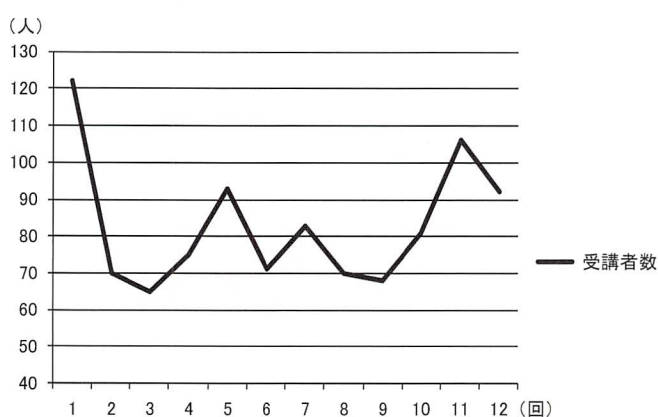
世界遺産関連講座は、行田市と埼玉県が推進する埼玉古墳群の世界遺産への登録推進に関連して行われた講座で2回行われている。1回目は、九州国立博物館で行われた、『古代九州の国宝』展へ金錯銘鉄剣が貸出出品された際に実施された、「X線CT スキャナー」による解析結果について報告が行われ、「銘文以外の柄元の部分にも銘文と同様の金属反応を示す個所が見つかった」(野中・田中2011)事が新しい知見として示された。

2回目は、埼玉古墳群の群構成の配置論について特に造出しの位置に注目して、古墳の正面観を考察したもので、台地上に展開する古墳群を水上交通との関係で通行する者には埼玉古墳群が視覚的にもとらえられたのではないかとするものであった。

「学芸員の視点」は、学芸員が日ごろ調査や研究のテーマとしている事を一般向けに紹介・解説するもので、考古学を多角的に見た報告がなされた。

### 3 アンケートの結果

#### (1) 受講者数の推移



第1図 受講者数の変化

アンケートの項目は、受講者の居住地・年齢層・来館回数・受講回数・講座の開催を知った媒体・講座の感想などを問うものであり、回収率は毎回参加者の内約70%と比較的高い回収率であるため、一定の傾向はつかめるものと考えられる。

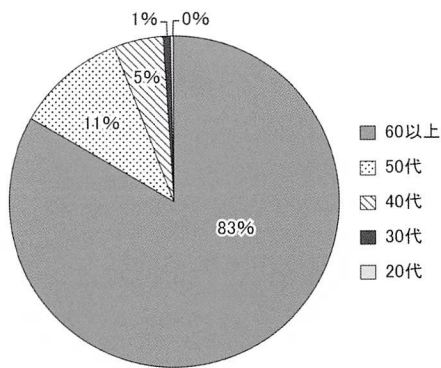
まず、受講者数の年間推移を見てみたい。講座の定員は、外部講師による企画展関連講座が100名で、それ以外の講座は毎回70名としているが、年間を通して見ると平均83

名で定員以上の参加があり、企画展関連講座も受付上は100名を超えており、毎回事前受付でお断りしている状態である。通常80名前後で推移する中で受講者が100名前後となる大きな山が世界遺産関連講座において2回ある。この事は、埼玉県と行田市で共同提案している「埼玉古墳群～古代東アジア古墳文化の終着点～」をコンセプトとした、埼玉古墳群の世界遺産登録推進運動への関心の高さを表したものと考えられる。

#### (2) 受講者の居住地と年齢層

居住地域は、県内居住者が94%を占める。その中でも行田市と熊谷市・鴻巣市など近隣市とさいたま市に集中する傾向を見る事ができる。

受講者の年代層を見ると、60歳以上が83%と最も多く次いで50歳代の11%で50歳以上の受講

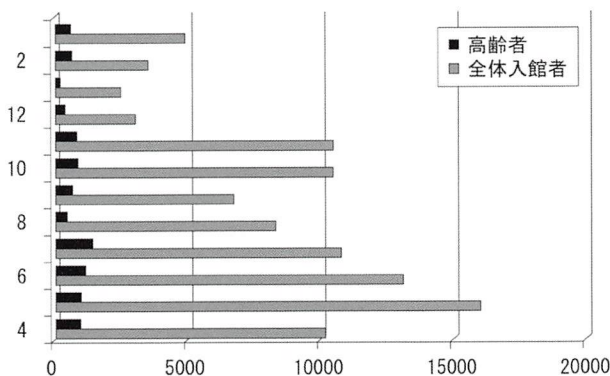


第2図 受講者の年齢

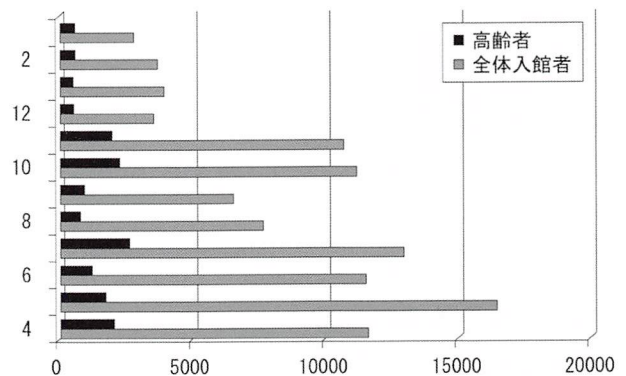
者を合わせると94%となることから、受講者の大半が高年齢者であると言える。

ここで、全体入館者の中での高齢者<sup>(1)</sup>数の傾向を見ると、平成16年度が10%前後であるのに対して、平成22年度は、各月10%から20%で推移している事がわかり、平成16年度と比較すれば図3・4のとおり全体入館者数には大きな変化がない中で、高齢者の入館者数は2倍近く夏から秋にかけて大きく増加している事がわかる。

入館者動向から当館の利用形態について分析した村田氏は、「今後、社会の高齢化が進展する中で、人文系の博物館施設が高齢者のニーズにこたえていくことは、必然的に要請されるものと思われる。(中略)入館者における高齢者の利用があまり伸びているとはいえないことは、今後の事業計画を考える上で考慮に入れなければならないデータであると考えられる。」(村田2006)と指摘しているが、平成22年度に行われた講座での高齢者数の割合と比較すると、この課題には一応対応できているのではないかと考えられる。

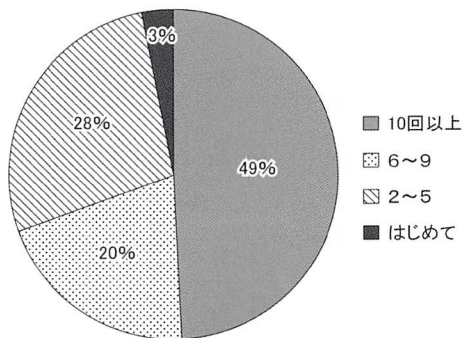


第3図 平成16年度全体入館者と高齢者

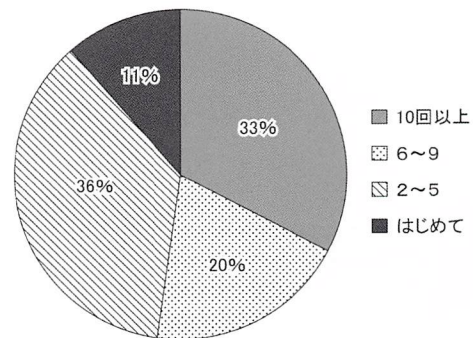


第4図 平成22年度全体入館者と高齢者

### (3) 来館回数と受講回数



第5図 来館回数



第6図 受講回数

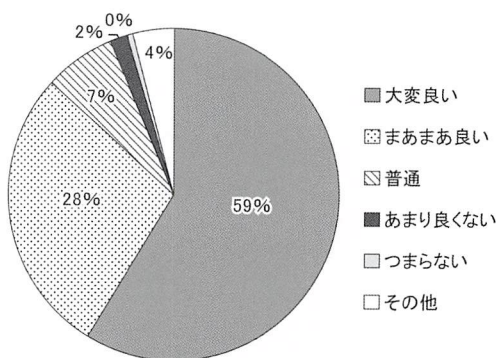
受講者の中での来館回数を見ると、10回以上が49%と半数近くに上り、6~9回が20%、2~5回が28%で複数回来館者を含めると97%を占めている。来館者においてもリピーターの率が極めて高い事がわかる。

また、受講回数を見ると10回以上の受講が33%と最も高く、次に2～5回の36%、6～9回の20%と続く、こちらも複数回受講者を含めると89%となることから、さきたま講座の受講者においてもリピーターが多いのが特徴と言える。

#### (4) 講座の満足度について

講座の満足度については、大変良いとまあまあ良いとを合わせた値は80%以上と非常に高く受講者の講座の質的な面での期待やニーズにもこたえられているようだ。それは講座の受講回数にも表れており、1年間の講座をとおして見れば10回以上が33%で複数の回受講を含めると受講者の約9割に達している点からも証明される。この事から、受講者は圧倒的にリピーターが多く、講座を受講することが年間のメニューとして定着している結果と考えたい。

これは、来館回数にも共通する点でもあり、来館者の約5割が10回以上の来館で、複数回の来館者割合は97%となる。



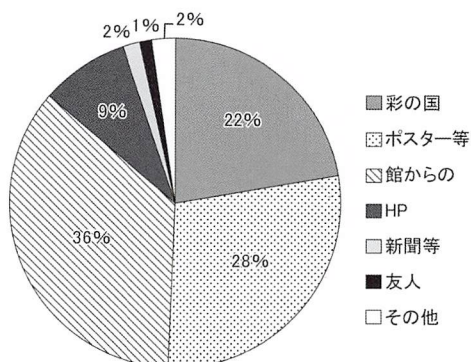
第7図 満足度

アンケート回答者の感想には、講座の満足感が次回の講座への参加意欲につながっている事がうかがえる。講座アンケートから満足感へつながる感想として上げられているものには、高度で通説とはやや異なる新しい視点に立った新説に興味を多く持つ人が多い一方で、基礎的な情報を要求している感想もあり両者は相反する面を持っており、今後講座のテーマを設定する上で、考慮に入れなければならない点であると感じている。

#### (5) 広報媒体について

講座の開催が周知された媒体として、「館からのお知らせ」を挙げた人が36%で最も多かった。館からのお知らせは、関東各県の各博物館施設・県内自治体の教育委員会等に配布した催物案内や館で作成し館内のラックにおいた年間講座案内のチラシなどである。これを見た人が多いと言う事は、来館時に講座の開催を知った可能性が高く、来館して再度講座を受講する事によるリピーター率の高さに関連しているものと思われる。つまり当館においては、館内での配布物(お知らせ)はかなり広報効果が高い事となる。

次いで多いのがポスター等の28%であるが、企画展関連講座の場合はポスター中に講座の案内がある事から、それを見ての受講が多い事が企画展関連講座の場合、講座のアンケート統計からも推察する事ができる。



第8図 広報媒体

催物案内やポスターは、博物館にとっては最も基本的な広報媒体であり、アナログでありながらその有効性はまだ高い事が裏付けられる。

また、県の広報誌で県内全域に新聞の折り込みとして全戸配布される「彩の国だより」の割合も22%と3番目に大きい。講座によっては最も大きな割合を占めているが、

紙面の都合により掲載されない場合があり、掲載された時とされない場合の差が大きく出る結果となっている。

さらに、1割近いのがインターネットのホームページからである。特に、22年度後半からはホームページ上からの電子申請も可能となり、その申請数は次第に増えつつある。受講世代が高年齢に集中している事もあり、大きな割合は占めていないが今後の広報媒体としてはインターネットの更なる普及とともに有効な手段となるものであり、積極的に利用と工夫をしていかなければならない。

#### 4 さいごに



今回は、平成22年度のさきたま講座アンケートから受講者の傾向を考察してきたが、データの分析が表面的なところにとどまってしまった。本来ならば過年度との比較が必要であろうが、一定の傾向はとらえられたものと考え

る。特に平成16年度と平成22年度の高齢者入館者の比較では、約2倍の伸びが見られており、その要因には社会的な

高齢化率の増加が背後にあると思われるが、それを吸収するだけの講座の内容が必要である。今後の講座の在り方にとどまらず他のイベント等の計画を考える上において、十分考慮しなければいけない点であろう。

#### 《註》

(1) 高齢者とは、65歳以上の無料入館者で統計を行った。

#### 《引用・参考文献》

埼玉県立さきたま史跡の博物館 2010 『官報』 No.5

野中 仁・田中英司 2011 「国宝金錯銘鉄剣の貸出と最新分析」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第5号

北條 芳隆 2010 「関東の前期古墳」企画展関連講座2 資料

村田 章人 2006 「入館者から見たさきたま資料館の利用形態」『調査研究報告』 第19号

## さきたま講座アンケート

お手数ですがアンケートにご協力をお願いいたします。

1 どちらからいらっしゃいましたか。

( ) 市・町・村 県外 ( )

2 年齢についてお教えてください

ア 19才以下 イ 20～29才 ウ 30～39才 エ 40～49才  
オ 50～59才 カ 60才以上

3 さきたま史跡の博物館 にいらっしゃるのは、何回目ですか。

ア はじめて イ 2～5回 ウ 6～9回 エ 10回以上

4 「さきたま講座」に参加するのは、何回目ですか。

ア はじめて イ 2～5回 ウ 6～9回 エ 10回以上

5 今回の催し物をどのようにしてお知りになりましたか。

ア 彩の国だより イ ポスター、チラシ、パンフレット等 ウ 館からのお知らせ  
エ 友人から聞いた オ 新聞・テレビ・ラジオ カ ホームページ  
キ その他 ( )

6 今日の催し物はどうでしたか。

ア 大変良かった イ まあまあ良かった ウ ふつう  
エ あまり良くなかった オ つまらなかった

(エ・オに○の場合、その理由 )

7 職員の対応は、いかがでしたか。

ア たいへんよい イ よい ウ ふつう エ あまりよくない オ 悪い

8 あなたが興味のある催し物は何ですか。

ア 考古学の講座（さきたま講座） イ 考古学のテーマ展示（開催中）  
ウ 最新出土品展 エ さきたまこふんぐんけんがくかい  
オ 史跡探訪 カ その他 ( )

9 今回の講座に参加されたご感想・ご意見があればお願いします。

.....  
.....  
.....

ご協力ありがとうございました